‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

21号 1990.12.17
文・編集・発行
恋怪子

LIVE: SLAYER 1990.12.5 渋谷NHKホール

はじめから2曲は全身総毛だったまま。6曲目くらいまでは、その凄さに口がぽかんとあいたまま。そして、おわりまでヴォーカル兼、ベースのトム・アラヤに目がくぎづけのまま。SLAYERの4人って、4人ともステージの上では個人としての人間を全く感じさせない。私には4人が、なにかからの、どこかからの使いのように思えた。
後半はステージを見ながら、ずうっと考えさせられつづけた。あの4人が音楽を通して私にこう言っている。神を求めるな、悪魔のせいにするな、って。人間はどこまでいっても人間だって。どこまでいっても神はない。どこまでいっても悪魔はいない。だから人間として人間を生きることが大事だ、って。SLAYERをきいているあいだは、神を求めず、悪魔のせいにもせず、人間として人間を生きることができる、って自分を信じることができた。道をSLAYERの音楽が拓(ひら)いてくれていた。SLAYERは人間の歴史がつかわした使い。

LIVE: ティラノザウルス 1990.12.7 渋谷ラ・ママ

詩はいつも時流の先導に立って、来るべき世紀の感情を最も鋭敏に触知するものである。されば詩集の真の評価は、すくなくとも出版後五年、十年を経て決せられるべきである。五年、十年の後、はじめて一般の俗衆は、詩の今現に居る位地に追ひつくであらう。即ち詩は、発表することのいよいよ早くして、理解されることのいよいよ遅きを普通とする。かの流行の思潮を追って一時の浅薄なる好尚に適合する如きは、我等詩人の卑しみて能はないことである。
詩が常に俗衆を眼下に見くだし、時代の空気に高く超越して、もっとも高潔清廉(せいれん)の気風を尊ぶのは、それの本質に於て全く自然である。

「あふれだす言葉を書きとめるペンを盗まれて　…な(ききとれなかった)ペンを持つ男のところへ行ってきき　ヘイ、ベイビイ そいつも一本だけ俺に貸してくれよ　そしたらそいつが俺に死ねって　オー、レイディ いらだちを全部投げすてて　この恋のためだけ君に歌おう」という新しい歌よかった。そして、心にわきあがってくるものを、ずうっと探っているうちに上記の萩原朔太郎の文に出会った。
ティラノザウルスのこの日のライブはヴォーカルの人の一人舞台のようで、他のメンバーはみんなバックバンドをやってるみたいだった。いろんな音がまざりあって、重なりあって、狂いあって、っていうのがない。それでもあの新しい一曲をきけただけで私は満足。

MOVIE:「ロッキー・ホラー・ショウ」12/20(木)〜12/29(土)
連日9:00PMより1回レイトショウ シネマアルゴ新宿

記事以外でよかったLIVE: 11/18 THE BLUE HEARTS NKホール 11/29 ロッキー・ホラー・ショウ&ライブ 浅草ときわ座 12/2 シルエット原宿歩行者天国 12/8 シオン パワーステーション

MOVIE: “Leningrad Cowboys Go America”

(レニングラード カーボーイズ ゴー アメリカ)

美しくて、不思議で、さびしい映画。「ハハハ…」「ウリーッ!」を連発するほどなのにミョーにさびしい。そして、実にシュール。

萩原朔太郎詩集
河上徹太郎編

BOOK: 萩原朔太郎詩集

うまれてはじめて詩を読んでゾクゾクした。
詩はもちろんのこと自らの序文も!!!

WORDS: STUART HAMM

あらゆるものに対して耳を傾けること。さまざまな影響を取り入れるといい。最初のうちは、他人のフレーズをプレイしてみることをいけないと考える必要はない。僕もそうやって学んだ。ただしそのうち、オリジナルにならなければいけない段階にくる。自分がやって、ほかの人はやらないことを見つけなくてはならない。そして、それを磨く。23歳くらいから、僕も友達もみなずっと一文無しだった。それで「僕はコンピューターの勉強をするよ。音楽がものにならなかったときのために」とか言い出す人もいた。こうして音楽の道からそれていった人はそれっきりだったよ… 自分のやってることが成功しないんじゃないかと思ったら、そのとたんに逃げだしたことになる。本当に、どうしてもやりたいのなら、それにライフ・スタイルを合わせ、やりぬくしかないんだ。うんと努力して、オリジナルになって、耳をオープンにしておくこと。

ベースマガジン 1990年12月号より

LIVE: THE STREET BEATS 1990.11.27 パワーステーション

THE STREET BEATSをライブハウスで見るのはずいぶん久しぶりのことなのだけど、ステージがはじまる前から、前の方でギュウギュウ詰めになって「オキー!」「オキー!」と叫んでいるのを見て、あー、こういうのってTHE STREET BEATSに合ってるなって思った。うしろの方からでもOKIがよく見えた。知っている歌、はじめてきく歌、何曲かきいていて、あ、OKIには譲ったものがあるなって感じた。そして、譲ったものもあるけど、獲得したものもあるなって。でも、その獲得したものがまだ歌にはじゅうぶん出ていない。だから心がふるえることはなかった。後半になって「マニフェスト」、「スタンディング・スタンディング」といった新しい歌をきいているうちにステージのOKIが口から糸をはき出している蚕に見えてきた。糸=歌をはき出し、それがまゆになって、蚕=OKIがそのまゆに包まれていく…。「BOY'S BE A HERO」、「NAKED HEART」で心がすこしふるえた。あ、OKIはこの歌をうたってまゆの中に姿を消していくんだなァ。まゆの中でサナギになったOKIがこんどまゆを破って姿を現わしたとき、どんなふうになってるんだろう?
OKI、私はあなたが「そんなに俺たちを急がせないで」とうたっているように、あなたを急がせたくない。だってサナギがスゴイ何かになることが信じられるから。「オキー!」「オキー!」と叫んでいた子どもたちも、そのOKIのサナギ=可能性に対してこぶしをふりあげていたんだと思うから。

されば詩には進歩がない。詩人の生涯には成長がない。詩人はただ時々に変化する。青虫が蛹(さなぎ)となり、蛹が転じて蝶類になるやうに、詩人もその生涯を通じて変態する。我々が蝶となった時、我々はもはや再度青虫の貪婪(どんらん)を繰返さず、彼らの悲しき歌を唄はうとしないだろう。私は過去にすくなくとも三期の変態をした。「愛憐詩篇時代」「月に吠える時代」そして「青猫時代」である。今、私はさらに一の新しき変化をするため、古き殻を脱がうとしてもがいてゐる。私はまた変るであらう。けれども「力」が、尚(な)ほ充分に感じられる朝まで、しばらく地下に冬眠する蛹とならう。私は尚弱い。日光は空に暗く、生えない雛(ひな)が殻の中でかじかんでゐる。

萩原朔太郎

POEM: 萩原朔太郎「さびしい人格」

さびしい人格

さびしい人格が私の友を呼ぶ、
わが見知らぬ友よ、早くきたれ、
ここの古い椅子に腰をかけて、二人でしづかに話してゐよう、
なにも悲しむことなく、きみと私でしづかな幸福な日をくらさう、
遠い公園のしづかな噴水の音をきいて居よう、
しづかに、しづかに、二人でかうして抱き合つて居よう、
母にも父にも兄弟にも遠くはなれて、
母にも父にも知らない孤児の心をむすび合はさう、

ありとあらゆる人間の生活の中で、
おまへと私だけの生活について話し合はう、
まづしいたよりない、二人だけの秘密の生活について、
ああ、その言葉は秋の落葉のやうに、そうそうとして膝の上にも散つてくるではないか。

わたしの胸は、かよわい病気したをさな児の胸のやうだ。
わたしの心は恐れにふるえる、せつない、せつない、熱情のうるみに燃えるやうだ。
ああいつかも、私は高い山の上へ登つて行つた、
けはしい坂路をあふぎながら、虫けらのやうにあこがれて登つて行つた、
山の絶頂に立つたとき、虫けらはさびしい涙をながした。
あふげば、ぼうぼうたる草むらの山頂で、おほきな白つぽい雲がながれてゐた。

自然はどこでも私を苦しくする、
そして人情は私を陰鬱にする、
むしろ私はにぎやかな都会の公園を歩きつかれて、
とある寂しい木蔭に椅子をみつけるのが好きだ、
ぼんやりした心で空を見てゐるのが好きだ、

ああ、都会の空をとほく悲しくながれてゆく煤煙、
またその建築の屋根をこえて、はるかに小さくつばめの飛んで行く姿を見るのが好きだ。

よにもさびしい私の人格が、
おほきな声で見知らぬ友をよんで居る、
わたしの卑屈な不思議な人格が、
鴉のやうなみすぼらしい様子をして、
人気のない冬枯れの椅子の片隅にふるえて居る。